

鈴木 健大



「とどろき学習室・よこはま学習室」代表
都留文科大学教養学部地域
社会学科准教授

神奈川県

2011年3月末、東日本大震災で被災した人たちが避難生活を送っていた神奈川県川崎市の「とどろきアリーナ避難所」で、当時川崎市職員だった鈴木氏は、ボランティアとして入った体育館で雑魚寝する子どもたちを見て「せめて勉強する場があれば」と思ったのがきっかけで、4月から会議室を借り、大学生ボランティアを募って学習支援を始めた。その後、避難所が閉鎖され学習室も避難所がある間だけのつもりだったが、受験期の中学3年の子の存在が大きく、一人でもそういう子がいるならば他にも沢山いるはずだと思い、公民館を借りて学習室を再スタートさせた。現在は、東日本大震災・熊本地震で被災して都会で生活する東北・熊本の子どもたちを対象に、川崎市と横浜市で「とどろき学習室」・「よこはま学習室」をそれぞれ週2回ずつ開催し、進学や学校の授業の学習サポートをしている。参加は無料。そのほか夏期講習、模擬試験、模擬面接、勉強合宿、キャンパスツアー（将来のことについて考える機会を創出することを目指す）、遠足、クリスマス会などの取り組みも行っている。

「とどろき学習室・よこはま学習室」は、東日本大震災・熊本地震を受け都会で生活する東北及び熊本の子どもたちを対象にして、大学生ボランティアにより、進学や学校授業の学習サポートの機会を創出するとともに、大学生と子どもたちとの居場所をつくり、子どもたちに生きる力及び将来の夢を持ち続けてもらう機会を創出することを目的としています。

「とどろき学習室」は平成23年4月末、川崎市中原区のとどろきアリーナ避難所の中で学習支援を開始したのが始まりです。避難所閉鎖後は公民館に場所を変え、現在は川崎市中原区にて開催、川崎市、横浜市在住の中学2年生から高校3年生までの計5人が通っています。また、「よこはま学習室」を平成24年5月から横浜市西区で開始し、現在、横浜市、川崎市、藤沢市、鎌倉市、茅ヶ崎市、大和市、相模原市、海老名市、伊勢原市在住の小学3年生から高校3年生までの計30人が通っています。子どもたちは岩手県・宮城県・福島県・熊本県の出身です。子どもたちは家庭の経済状況の悪化、家族離れての生活、社会の差別・偏見などの状況に置かれ、母子家庭等、生活基盤が元々弱い中で震災に遭遇した家庭も多く、これらの課題が十分に解決されないまま今日まで至っています。

これまで258人の大学生が携わり、現在は30人の大学生とOB、OGが支えています。参加は無料、平成30年7月末、開催回数は通算1,116回になりました。また、子どもたちの楽しい思い出づくりや将来のことについて考える機会を創出することを目指し、ピクニックや大学文化祭に招待するなどの取組も行っています。

平成24年8月から夏季に宮城県東松島市にて子どもたちの学習支援を開始しました。さらに、高校に出向いて高校生と震災のつながりを考える授業を平成24年度から

実施したり、商店街で熊本地震の街頭募金を行ったりもしました。

この度の西日本集中豪雨の被害には、一同胸を痛めております。神奈川県や東京都では公営住宅等における受け入れが始まり、私どもも自治体の協力を仰いで学習室への案内を開始しました。これまでの経験を生かして広域避難の子どもたちへの応援ができればと思っておりますので、引き続き皆様の御支援をよろしくお願いいたします。

今回の名誉ある受賞は、私たちスタッフの励みになりましたと共に、社会課題に向き合う多くの団体と知り合う機会にもなり、大変勇気づけられました。私たちもまた、支えられていることを実感いたしました。貴財団の皆様、これまで私たちを応援してくださっている皆様に厚く御礼申し上げます。



▲よこはま学習室 帰りの会 2017年7月9日



▲秋の遠足 横浜子ども自然公園 2016年11月13日



▲クリスマス会準備の様子 2017年12月17日



▲とどろき学習室の様子 2017年7月9日



▲よこはま学習室の様子 2017年11月



▲鎌倉 建長寺で勉強合宿 2017年8月26日

特定非営利活動法人 京都難病連



代表理事
北村 正樹

京都府

1974年（昭和49年）結成、以降、今日に至るまで「病気に負けないよう仲間同士が励まし合い助け合う」、「病気のことを正しく理解する（仲間に伝える）」、「病気があっても安心して暮らせる社会の実現」などを目的として活動をしている。

1980年に「難病相談センター」を開設、難病専門医や看護師、社会福祉士が行う専門相談、および同病患者が行うピア相談を日常的に行っており、年間1,000件を超える相談に対応している。

また、1998年には「難病医療講演・相談会 & 交流会」事業を開始、毎年約15疾患の医療講演と個別相談会を開催し続けており、専門医のセカンドオピニオンが気軽に受けられることや同病の仲間との情報交換や交流ができることで好評を博している。一方、難病患者や障害者の生活の質の向上を目指す運動にも取り組んでいる。

加盟団体 16団体 会員数 約2,500名（2017年3月末現在）

（推薦者：京都わらび会）

この度は、栄えある社会貢献者表彰を授与いただき心より感謝申し上げます。表彰式では、自身の命を顧みず人命救助にあたられた方々や、国内外で素晴らしい活動をされている方や団体のお話をうかがい、世の中には、すごい人が大勢いるのだと感激しました。

治る見込みの少ない難病に罹ると、病気から来る身体的な苦痛だけでなく、「この先どうなっていくのだろうか」という不安にかられます。症状の進行、高額な医療費、就労・就学の問題、介護・看護の負担など、様々な問題が絡み合っ、家族を巻き込んで生活が一変することは稀ではありません。

京都難病連は、そうした難病患者や家族の不安を少しでも軽減して、病気を受け入れながら、前向きに暮らしていくことを目的として、当事者がやるべき活動、当事者だからできる活動に重点をおいて事業を進めています。

事業の柱となる難病相談センター事業では、看護師、社会福祉士、専門医による専門相談と、同じ困難を体験してきた患者が行うピア相談を毎日受け付けており、年間600件を超える相談に面接や電話で対応しています。また、仲間の交流会「難病カフェ」の開催や、ピアサポートの質を高めるための「ピアサポーター養成研修会」などを実施しています。

もう一つの事業の柱として、「難病医療講演・相談会」を年間14～15回開催しています。幸い、京都には様々な難病の専門の先生がおられます。そうした先生方に講師になっていただくことによって、レベルの高い医療講演や個別相談ができていますのではないかと考えています。

さらに、当事者がやらなければいけないこととして、制度の課題や地域生活上の問題やニーズを取り上げて、府や国に要望する患者運動や、「世界希少・難治性疾患の日」

の地方イベントを開催するなどの啓発運動にも取り組んでいます。

行政支援の及ばない部分を埋めるのがNPOの役割とされています。同じ体験を持つ仲間によるピアサポートはまさにその部分になると思います。これからも、当事者だからできるピアサポートを中心に、一人でも多くの難病患者が病気はあっても明るく前向きに暮らせることを目指して、活動を続けていきたいと思っています。



▲1974年（昭和49年）結成総会



▲事務所での難病相談



▲患者作品展



▲RDD 世界希少・難治性疾患の日 京都開催



▲意思伝達装置の実演



▲難病医療講演・相談会

犬飼 公一



愛知県

滋賀医科大学に進学後、一般家庭と生活保護世帯の子どもの高校進学率に大きな差があることをニュースで知り、「教育から貧困の連鎖を断ちたい」と2007年、大津市内で生活保護世帯や母子家庭の中学生を対象にした学習会を開き延べ1,000人を超える中学生の学習支援を行った。2011年に日本で初めて全国の学習会をつなぐ「全国学習支援ネットワーク」を設立し、学習支援事業を広く浸透させた。全国各地で講演やシンポジウムを開催し、見えにくい「子どもの貧困」問題の啓発活動を行っている。この問題のシンボルマークとして「虹色リボン」をデザインし虹色リボン運動をして問題意識を浸透させる活動を行っている。医師となった現在も活動を継続し、専門知識を活かして学習会に参加する子どもたちの健康チェックを行う「往診」も定期的に行っている。

(推薦者：田中 嵩久)

この度は第50回社会貢献者表彰という栄えある名誉をいただき、安倍会長をはじめとする関係各位、審査委員の皆様、そして推薦人である田中氏に厚く御礼申し上げます。

私はこれまで、子どもの貧困問題について主に生活保護世帯の児童に対する学習支援活動や啓発活動を通じて取り組んで参りましたが、その地道な活動の成果に対してご評価いただけることはより一層の活動の励みとなりました。

さて、「子どもの貧困問題」とは、貧困の世代間連鎖などが原因で、子どもたちに将来にわたって不利が蓄積し、健全な成長を阻害するという問題です。ここでいう貧困とは、1日1ドル以下で暮らさなければならない「絶対的貧困」というとらえ方ではなく「相対的貧困」すなわち、ある所得以下で暮らさなければならない世帯に属する子どもたちが直面する貧困感です。我々の活動は、この貧困状態から生まれる疎外感や孤独感という、お金では決して補填することのできない子どもたち独特の生きづらさを支える取り組みです。

近年は子どもの貧困問題対策法の成立や大学における給付型の奨学金制度の充実など、子どもの貧困をめぐる環境は着実に転換しつつあります。しかしながら、それらの網にもれてしまうような、受動的な支援では支援の手が届かない子どもたちがいるのも事実です。そのような子どもたちに学習支援という居場所を提供し、教育という子どもたちの将来へ渡る自立性をはぐくむ財産を育てようとするのが我々の活動の基本的姿勢となっています。今年で活動12年目となった現在では、以前、学習支援活動で支援されていた中学生が大学へと進学して、学習支援の現場に今度は教える側として、中学生や小学生の支援を行っているというこれまでは考えもしなかった思いやりの連鎖が全国各地で報告されています。

今回、社会貢献者表彰の受賞をさせていただいたことも、「子どもの貧困」問題の

啓発につながり、さまざまな追い風が吹いていることを実感しております。頂いた賞金を通して新しくシンポジウムを企画しております。実施の際には是非足をお運びください。今後とも医師として学習会に参加する中高生たちの健康チェックを行いながら、子どもたちの心に寄り添い、社会全体が健康になるようにこれからも活動を続けていきたいと思っております。本当にありがとうございました。



▲講演の様子



▲学習支援の様子



▲街頭募金キャンペーン



▲リボンフェスタの様子



▲虹色リボン運動

特定非営利活動法人 精神障害者回復者クラブすみれ会



副理事長
石山 貴博

北海道

日本で唯一の精神障害者回復者の当事者だけの組織で、1970年に患者会のメンバー4名により設立された。当初はデイケアセンターのように、患者同士が地元のニッカウキスキーの工場見学等、皆で集まって何かをしよう、どこかへ出かけようという集まりだったが、そのうち利用者から生活保護・年金・障がい者手当の取得に関する質問などが寄せられるようになり、利用者へ送るイベントの案内状が現在の機関誌すみれとなり、50年の間に利用者の要望により活動が変化していった。

現在、札幌市からの補助金もあり、95名の利用者と、スタッフ11名が月曜から金曜までこの施設に集い、おおまかなカリキュラムを基に過ごしている。一日の始まりは全員参加の朝礼で、スケジュールの紹介や作業の担当を決め、風邪が流行っている等の注意事項が伝えられ、利用者からも相談や心配事について話がある。作業は段ボール製作等で1時間30分ほど行い、それからみんなまで昼食をとり、午後はレクリエーションの時間で囲碁やおセロゲーム、カラオケやおしゃべりと好きな事をして過ごす。

当事者でもある理事長は、就労支援という縛りに囚われることなく、ここはあずましい場所（方言で居心地のいい場所）でありたいと、“のんき・根気・元気”をモットーにしている。団体はこれまでに、身体障害者・知的障害者には適用される一方、精神障害者にはなかった、札幌市の公共交通機関の割引や、共同作業所の補助金の上限人数撤廃等を札幌市に働きかけを行い成果を挙げている。

1970年代、公衆浴場には、“入れ墨・精神病患者お断り”と張り紙があったほど、一様に世間では精神病患者は外に出すなという風潮だった。それは医師も一緒に、彼らに仕事等出来るはずがないと思われていたという。

この団体は理事も含め当事者で運営されている唯一の団体であるため、全国から見学を希望する連絡が多く、障がい者施設としては再来年に50周年を迎える知名度の高い施設。

今回は、名誉ある表彰を有難うございました。1日目の写真撮影から始まり、懇親会での1分間スピーチ、安倍昭恵会長の乾杯、初めての体験であり、また、宿泊させていただいた帝国ホテルの素晴らしさに感激させていただきました。2日目の表彰式の入念なりハーサルから始まり、色々な方々の紹介、完璧な段取りにまた感激しました。安倍昭恵会長から無事、有難く表彰を受け、パーティー会場に移り美味しく食事を頂き、安倍昭恵会長と名刺交換をさせていただき、是非、すみれ会に訪問して下さいとお願いさせていただきました。精神障害者当事者の会のすみれ会、精神障害者の実態、生活、活動の様子を見て、聞いていただきたくお願いさせていただきました。

すみれ会の歴史は古く、今年で48年間の歴史があります。健全と言われる人達の力ではなく、精神障害当事者が自分たちで会を運営しています。法人が母体で、二つの地域活動支援センターを運営しています。会の運営活動だけではなく、遅れている精神障害者に対する制度の拡充を求める活動なども行っております。仲間の相談にのる事もあったり、長期にわたって精神科病院に入院している仲間を退院につなげる活動、面会、お手紙を出す、レクリエーションで楽しみ、地域活動支援センターでは毎日仕事をし、皆障害に負けずに元気に活動をしています。皆、無理は出来ませんが、出来る

事を出来るときに無理せず行い、継続できる様に頑張っています。今回の受賞を励みにして、これからも精神障害者が元気で過ごせる活動を目指して活動して行くと思います。

すみれ会にはモットーがあり、「精神障害者が人格を持った人間として尊重され、人並みの幸せな生活を送れるようになること目標としています。」もう一つは、「のん気、こん気、元気」です。精神障害者の歴史ゆえの言葉とっております。

日々の活動に奮闘しておりますが、これからも精神障害者に寄与出来る様に活動して行きたいと思っております。今回の名誉ある表彰、本当に有難う御座いました。



▲すみれ祭



▲ミシン作業部



▲一泊旅行



▲箱折り作業



▲忘年会



▲料理当番

坂本 洋子



里親ひろば ほいっぷ代表

東京都

特別支援学校の教員だった夫と共に東京都の養育里親に登録し、1985年から里親として子どもたちを育てて33年、現在17人目の4歳を含め5人の子どもと暮らしている。

2003年に里親サロンをスタートさせ里子たちの会、支援者の会、そして地域に開かれたコミュニティ食堂など「里親ひろば ほいっぷ」のグループ代表でもある。

里親制度は、虐待や死別など様々な事情により家庭での養育が困難または、受けられなくなった子どもたちを温かい愛情と正しい理解を持った家庭環境の下で養育する制度である。厚生労働省によると、日本で里親に預けられているのは18.3%の約6,500人（2016年度）と先進国の中では、里親受託率が低く、同省では未就学児の同率を7年以内に75%以上にする目標を掲げている。

地の塩、世の光として労していらっしゃる方々が国境を越えて一堂に会する素晴らしい式典の末席に名を連ねることを許されたことに感動致しております。33年間、里親の世界しか知らずに過ごして来た世間知らずな私は、ニュースやテレビで拝見した方々と同席させていただき、初めて知る活動には感嘆し、身を挺しての救助はとてもできない…と、終始心洗われた式典でした。

私が里親登録をした当時、里親家庭への無理解や偏見はすさまじく、20代の里母に何ができると言わんばかりの目線や里親家族という形態だけで妙な興味をひき、必ずお子さんは？と不妊を確認するかのように聞かれたものでした。親に恵まれなかった子どもと子に恵まれなかった大人が新しい家族を作っていくことは私には自然なことでした。しかし里親になってみると実子、里子、分け隔てない家庭を目にし、お気持ちの広さに敬服したものです。

何人も育てたいと思ったわけではありませんでしたが気がつけばたくさんのお子さんとお出会っていました。私の夢は彼らがこの世にサヨナラをするときに「いろいろあって苦勞もしたけれどなかなかいい人生だったよ」と微笑んでこの世の命を終えてくれることです。もちろんその微笑みを私はあの世で見ることになります！

ただ、人が人を育てるのはたやすいことではなく、予想もつかない現実打ちのめされ、心の底に涙が流れ続ける日もあれば、あまりに非力な自分を思い知らされることも度々です。しかし大小さまざまな喜びがうねりのようにくり返される子どもたちとの日々は私に自分の限界を超えた力をもたらしてくれます。

特に障がい児との生活は殊更に私にパワーをくれます。どんなお子さんとも仲良くなれる自信のあった高校生の時から障がい児と暮らすことが私の願いでした。もうすぐ18人目のお子さんとの出会いがありそうでワクワクしています。今回の受賞は私の

名前でしたがポジティブに頑張っている子どもたちみんなへの賞であると思っております。

最後になりましたが副会長内館牧子氏のメッセージに里親さんが、初めて里親になって良かったと思った、と嬉しそうに言っていました。私もこれまでの里親人生が走馬灯のように思い出され、感動と感謝で拝聴させていただきました。

安倍昭恵会長はじめ役員、選考委員の皆様から大切な人生の節目を頂戴しましたこと、身に余る光栄と子どもたち共々感謝しております。



▲里親ひろば ほいっぶ264



▲読売中高生新聞 2017年10月13日



▲読売新聞 2017年7月30日
孤絶家族内事件9「居場所」里親がくれた



▲朝日小学生新聞 2017年10月31日

年度別表彰分野・受賞者数の実績

分野	年／回										小計
	1回 昭46	2回 47	3回 48	4回 49	5回 50	6回 51	7回 52	8回 53	9回 54	10回 55	
人 命 救 助 等	93	203	156	157	213	197	235	255	230	183	1922
国際社会への貢献											0
青少年育成・スポーツの振興	14	21	33	101	111	95	97	81	75	76	704
社会福祉への貢献	62	58	82	149	140	200	149	114	102	119	1175
文化の振興				3	7	11	5	9	11	11	57
地域社会への貢献	14	18	12	14	26	19	20	15	12	14	164
運輸交通への貢献	23	15	16	24		43	66	57	55	52	351
そ の 他	34	35	87	97	114	95	105	135	139	105	946
小 計	240	350	386	545	611	660	677	666	624	560	5319
開催日	3/23	11/10	10/26	9/26	12/10	11/5	11/8	11/7	11/7	11/21	
式典会場	①ホテルニューオータニ				②笹川記念会館						

分野	年／回										小計
	11回 昭56	12回 57	13回 58	14回 59	15回 60	16回 61	17回 62	18回 63	19回 平元	20回 2	
人 命 救 助 等	195	208	177	198	274	193	106	127	89	98	1665
国際社会への貢献										19	19
青少年育成・スポーツの振興	81	93	89	78	92	117	22	24	26	26	648
社会福祉への貢献	95	112	124	109	104	103	38	38	46	57	826
文化の振興	16	13	17	20	19	12	9	7	13	8	134
地域社会への貢献	15	12	12	15	8	13		3	7	11	96
運輸交通への貢献	42	40	38	45	35	31	55	54	69	76	485
そ の 他	96	95	104	94	86	56	57	48	39	10	685
小 計	540	573	561	559	618	525	287	301	289	305	4558
開催日	11/5	11/30	11/16	11/6	11/20	11/21	11/10	11/8	11/8	10/9	
式典会場	②笹川記念会館										

分野	年／回								小計	受賞者 合計
	21回 平3	22回 4	23回 5	24回 6	25回 7	26回 8	27回 9	28回 10		
人 命 救 助 等	101	82	34	15	47	21	27	16	343	3930
国際社会への貢献	13	17	14	4	8	5	5	6	72	91
青少年育成・スポーツの振興	40	54	44	29	22	25	28	32	274	1626
社会福祉への貢献	64	75	68	28	36	37	34	42	384	2385
文化の振興	11	15	10	3	8	10	10	12	79	270
地域社会への貢献	12	9	4	7	14	20	19	19	104	364
運輸交通への貢献	83	80	49	18	14	18	16	20	298	1134
そ の 他	13	7	7	0	0	0	0	0	27	1658
小 計	337	339	230	104	149	136	139	147	1581	11458
開催日	11/7	11/5	11/1	11/7	11/1	11/12	11/13	11/9		
式典会場	②笹川記念会館		③ホテル海洋			④東京全日空ホテル				

分野	年/回	29回	30回	31回	32回	33回	34回	35回	36回	小計	受賞者 合計
		平11	12	13	14	15	16	17	18		
第一部門 緊急時の功績		6	5	6	8	5	4	5	2	41	
第二部門 多年にわたる功労		14	15	11	12	13	11	11	18	105	
第三部門 特定分野の功績 (海の貢献賞)			4	7	8	8	11	9	9	56	
(国際協力)			2	2	1	3	3	4	2	15	
(ハッピーファミリー)			2	2	1	0	2	0	0	7	
(21世紀若者)			0	0	2	1	3	1	2	9	
子ども読書推進賞						3	3	3	3	12	
小計		20	24	24	28	29	29	28	32	214	11672
開催日		11/10	11/22	10/29	11/19	11/4	11/15	11/16	11/20		
式典会場		④	①	④東京全日空ホテル							

※平成11年度より一般からの個人推薦を受付。

平成11年度より表彰分野別功績内容を、部門別功績内容とする。

平成12年度より第三部門を新設、テーマを持った特定の功績に対応する。

平成15年度より子ども読書推進賞を新設。

分野	年/回	37回	38回	39回	40回	41回	42回	43回	44回	45回	小計	受賞者 合計
		平19	20	21	22	23	24	25	26	27		
人命救助の功績		9	13	11	11	8		3	9	0	64	
社会貢献の功績		33	35	34	34	39		36	35	47	293	
特定分野の功績 (海の貢献賞)		1	2	3	5	2		2	0	0	15	
海への貢献の功績									3	2	5	
子ども読書推進賞 表彰式：6/26 会場：虎ノ門パストラル		1									1	
東日本大震災における 貢献者表彰 表彰式：5/1 帝国ホテル							128	12			140	
小計		44	50	48	50	49	128	53	47	49	518	12190
開催日		11/13	11/17	11/24	11/16	11/21	5/1	11/25	12/1	11/30		
式典会場		④ ANA インターコンチ ネンタルホテル				⑤帝国ホテル						
											12190	

平成19年度より分野名を変更。子ども読書推進賞は最終回。

平成24年度は東日本大震災における貢献者を表彰。

平成26年度より特定分野の功績(海の貢献賞)は海への貢献の功績に変更。

分野	年/回	46回	47回	48回	49回	50回	51回	52回	53回	54回	小計	受賞者 合計	
		平28	28	29	29	30	30	31	31	32			
人命救助の功績		9		11		11					31	31	
社会貢献の功績		11	51	17	53	29					161	161	
小計												192	
開催日		7/1	11/28	7/21	11/27	7/6							
式典会場		⑤帝国ホテル											
											12382		

平成28年度より年に2回式典を開催。

都道府県別受賞者内訳

県名	第49回 までの累計	第50回 受賞者	受賞者数
北海道	655	3	658
青森県	180		180
岩手県	214	2	216
宮城県	388		388
秋田県	124		124
山形県	155		155
福島県	177		177
茨城県	200	1	201
栃木県	147	1	148
群馬県	243		243
埼玉県	470	1	471
千葉県	399	2	401
東京都	1,164	4	1168
神奈川県	621	3	624
新潟県	260		260
富山県	144		144
石川県	143		143
福井県	205		205
山梨県	134		134
長野県	200	1	201
岐阜県	216		216
静岡県	311	1	312
愛知県	311	4	315
三重県	164		164
滋賀県	98	2	100

県名	第49回 までの累計	第50回 受賞者	受賞者数
京都府	209	1	210
大阪府	487	1	488
兵庫県	517	1	518
奈良県	111	1	112
和歌山県	144		144
鳥取県	91		91
島根県	111		111
岡山県	306		306
広島県	413	1	414
山口県	272		272
徳島県	176		176
香川県	196		196
愛媛県	150		150
高知県	73	1	74
福岡県	546		546
佐賀県	130	1	131
長崎県	268		268
熊本県	227	1	228
大分県	127		127
宮崎県	73		73
鹿児島県	141		141
沖縄県	162	2	164
その他	89	5	94
合計	12,342	40	12,382

※受賞者数は、当財団設立の昭和46年からの都道府県別受賞者件数の累計

※県名は、受賞者居住地の都道府県名 その他は居住地が海外

※受賞者数は、こども読書推進賞受賞者、東日本大震災における貢献者表彰受賞者も含めての累計

※第48回の人命救助の功績の袋本将史氏（滋賀県）伊藤修一氏（愛知県）八木隆太郎氏（愛知県）は愛知県1件としてカウント

※第50回の社会貢献の功績の広瀬紀子氏は愛知県、チョチョカイ氏は沖縄でカウントした

役員・評議員一覧

2018年7月1日現在

会 長	安 倍 昭 恵	公益財団法人 社会貢献支援財団
副 会 長	内 館 牧 子	脚本家、東北大学相撲部総監督
理 事	犬 丸 徹 郎	株式会社 和光 取締役執行役員
理 事	永 嶋 久 子	株式会社 資生堂 元取締役
理 事	澤 井 俊 光	一般社団法人 共同通信社 ニュースセンター長
理 事	三 谷 充	三谷産業株式会社 取締役会長
理 事	屋 山 太 郎	政治評論家
理 事	天 城 一	公益財団法人 社会貢献支援財団
監 事	篠 原 由 宏	篠原法律会計事務所、弁護士
監 事	中 村 元 彦	中村公認会計士事務所 所長
評 議 員	石 井 宏 治	株式会社石井鐵工所 取締役社長
評 議 員	井 沢 元 彦	作家
評 議 員	ロバート キャンベル	国文学研究資料館 館長
評 議 員	久 米 信 行	久米繊維工業株式会社 取締役会長
評 議 員	徳 永 洋 子	ファンディング・ラボ 代表

公益財団法人 社会貢献支援財団

設 立：1971年5月1日
所 在 地：東京都港区西新橋1-18-6 クロスオフィス内幸町801
郵便番号：〒105-0003
T E L：03-3502-0910
F A X：03-3502-7190
U R L：<http://www.fesco.or.jp>

社会貢献者の記録

2019年3月15日

発行者：公益財団法人 社会貢献支援財団

印刷：ヨシダ印刷株式会社

Supported by  日本 THE NIPPON
財団 FOUNDATION